

中高生とともに差別と闘う

『差別を憎んで人を憎まず』

吉成タダシ (うずしおランチ代表)



人権を語り合う中学生交流集会

今年開かれた「人権を語り合う中学生交流集会」の報告書が仕上がってきました。毎年のことですが、何とも言えず感慨深いものがあります。今年も昨年に続き新型コロナウイルスの影響を受け、規模を縮小しての開催となりました。大会に向けて四度積み重ね練りあげる実行委員会も、二回となってしまいました。県境をまたぐ移動も自粛せざるを得なくなり、県外からの参加もできなくなっていました。致し方ありません。

これまでも様々な紆余曲折があり、参加校数や参加者数が激減したときもありました。その度に、「この会を続けていく意味があるのだろうか」と、自問自答してきました。それでも続けてこられたのは、目の前に、続けることを望む中学生がいたからでした。自分を表現したい、自分の思いを伝えたいと願う中学生がいたからでした。

なかには、理不尽な思いを抱えながら日々の生活を送っている子もいました。そしてそれをきちんと受けとめ、自分なりの思いを返そうとする子もいました。そんなまっすぐな子どもたちの姿を見るにつけ、「やっぱり続けていこう」と思うのです。それはもしかすると、私自身が、そういつたまっすぐな子どもたちの中に浸っていただけなのかも、と思うこともあります。でも同時に、子どもたちに対して、「こんな大人

もいるよ」というメッセージを送りたかったのかもしれない。

世間的に「人権は大切」と言われつつも、本当にそうなのだろうか。疑わしくなるような現実もあります。子どもたちがそんな現実と直面したとき、「ちよつとは信じられる大人もいるのかな」とか、「世の中だつて少しずつ変えられるかも」と、思ってもらえたらと思うのです。

知るって楽しい

開会行事のなかで、中学生が自分の学校を紹介する場面があります。そのなかで、部活動についてふれることがあります。

例えば、「トウゲイブ」と聞けば、「へー、そんな部があるのか」と、「陶芸部」に漢字変換できるかもしれないが、「ソウキョクブ」と聞いて、サツと漢字変換できて、何をやる部か理解できる中学生が何人いるでしょう。当の本人たちはそれが当たり前の中で生活してまうから、何の違和感も持たず紹介を終えるのですが、漢字変換できずに理解できない中学生にすれば、「ソウキョクブー??」となります。

知らないことを知ることは、新たな気づきや発見であり、パッと笑顔の花が咲く瞬間でもあります。そんな表情を見るのは、見ていて楽しいものです。それが県外との交流となると、なおさらです。食べ物にしろ、方言にしろ、知れば知るほどに驚きの連続です。

他校のことなんて、学校名は知っていても、どれくらい規模の学校なのか、どんな制服なのか、校区にみんなが知っているどんな施設があり、どんな有名な企業があるのか、知るたびに「ほお」と思わせられます。知っているようで、実は分かってなかったということに気づかされるのです。自分の学校にはないものや、自分の学校とは違う部分を知って初めて、「あー、そんなことがあるのか」と思えるわけです。つまり、具体的な違いを知って初めて、認め合う前提に立てるわけです。

差別を憎んで人を憎まず

部活動や学校の取り組みの紹介についてもう少し。

参加校の中には、「郷土芸能部」という部がある学校があります。地区に伝わる、差別と闘った証として残る獅子舞を、中学校の部活動として取り組んでいるのです。学校の独自色がよく現れています。

また、「同和かるた取り大会」に取り組んでいると紹介してくれた学校もありました。以前は県内全域で取り組まれていたものですが、今や「絶滅危惧種」のようになっています。その中から、いくつかの札を紹介したいと思います。

あ 「明日への希望にもえて立ち上がれ」

か

「学校の教を家庭で子が先生」

け

「結婚は二人の理解と合意から」

ひ

「ひとことと思う心が差別生む」

と

「堂々とふるさとの名が言える子に」

*

この「同和かるた」、なかなかよくてきています。時代を越えて、あらためて知らない中学生に紹介してみるのがいいなと思いました。

そんな流れのなかで全体会が始まり、中学生による人権作文が発表されていきました。

「部落差別」について」と題された発表は、両親から聞かされた、結婚の時の出来事についてでした。結婚の時にされた「聞き合わせ」が、部落出身であるかどうかを調べるものだったと聞かされ、筆者は腹立たしい気持ちになったというのです。しかし筆者は、その矛先を両親や祖父母に向けるのではないと結論づけました。原因は、そういう行為に陥りやすい人の心の弱さだと。

「差別を憎んで人を憎まず」

昔よく聞いたこの言葉がスツと思ひ浮かびました。筆者が言う通りです。

身のまわりの現実から学ぶことで、遠くだった問題が、グツと身近な問題へと変わってきます。大切にしたいのは観念的なことではなく、そういつた学びなのです。(次号に続く)